# さいき

早討

是ハ紀州道成寺の住僧にて候
さても当寺に於てさる子細
あつてひさしく撞の鐘退転
仕りて候を此ほど再興仕る鐘を
いさせて候今月吉日にて候ほどに
鐘楼へ鐘乃供養をいたさばや思
なんぢは小能力まゐるか在候

鐘楼へあげてあるか

さん候早鐘楼へあげ申して候

ワキ 今日の鐘の供養を致さうずる

又存ずる子細の候ふ間女人

禁制にて候ふかまへて一人も

入るなと方々へ触れ候へ

作りし罪も消えぬべし〳〵かねの

供養に参らむ

これは此国の

ほとりに住む白拍子にて候

詞 さても道成寺と申す所に鐘の

供養の候ふ由申し候ふほどに

只今参らばやと思ひ候

上音 月はほどなく入汐の

けぶりみちくる小松原いそぐ

いそぐ心かまだくれぬ日高の寺
に着にけり〳〵
女人禁制ゆへはかとも供養の
庭なれはかなひ候まじいそいで
とく〳〵帰り候へ　シテ詞｜これは此国の
かたほとりに住白拍子にて候
鐘の供養に舞を舞べし

供養をおがませて給はり候へ
是はみたく濃女人にはかはりぬると
やはらずと人小君にてみやう
はくまきは浪まちうへ〳〵小
御同宿たちとも濃を申て候
何事ぞ　女人禁制と仰し我人
ほとにぞ方々にきゝもとく小へ

ごゑ國乃傍の白拍子まそハり
ざうと供養を承り罷てく拝よ
ざしあうは供養あり鐘をアりつめ
ひるよし中なりぞう拝乃法ハ候
ゆるう性ハ揚へいさし拝らん
早ツヒ
｜いや〳〵のさう衆徒の由
おわきさまん雅るざ拝りしハ

なはまし ひまなん ツカヒ｜あゝめも
なやんなだふくうさうのしめて
候へ大中ゞ女人気付つましお
よし候ら拝らん其藤を面白う
候藤ハりし衆か他ゆきろと
ゆはへへ申さうひるう宮ハ
三下詞
｜悲嬉しや酒か鐘哉可ひろ廻し

ゞ秋しやさゝたまりむとゝ

ゞあまりしまのみやひと落

上カル

ゞゑ布し越志りしのやりきえ

院狗子をしくゝめゝわきか袁

かゝはまたりるゝゞゝ音さめゝ

一ハル　下　下次第

うちやひゝゝゝむ

上カカル

ゑ成乃て

まゝ篭たなりるゝだしめゝ佛

下

よかり風乃みちなわ奥乃乃寺

一ハル　一下

なま茂とそざ成寺とはなくさ

上地

たわや山るおき屋春のか香

あそ三秋え入遊はる逢よ菊う

おき尚ゞくくあ猿ゝく

下円

ちゝ落うま月落鳥啼て霜お天

天にびんちしか猿なくひるの秋

す乃江村の漁火越る客
ひとく旅の神をよぶ浮ると
あまふやうすく孫らひわて
ばの気吹をしふおりへ大津
浪めしやと貌頭よ白さの
花とみえし胸の波きえす
う誇にん佐
言語道断かなの
役を春まるう望く女人禁制乃
よしやてふにめるうまきあは
ざふく皆ゝかうかわれゝ
ご説諸り流れて女人禁制と
申清る此とき乃ゝ我流なんり
此やなよ我存さ候は　まうは
是謂を読津ておらう物中に通し

羊

まんぢうは伝もろこしより伝へ

〔摘紙〕
昔此所に下野の庄司といふ

者ありけれバ老一人乃息女をもち

て比奥より熊野へ参詣しける

山伏のたゞーり庄司の元を我

宿坊と定めしけれバ所よりまうけぬ

庄司娘を寵愛して所のあづけにおけ

客僧こそ汝がつまよ末はとよ

なんどゝたはふれしをおもひ

むすめハまことゝしく思ひ年月

経るにある時ハ客僧庄司り

もとに来りしかバ女夜更人

志づまりて後客僧の寝所に忍び

いひまゐらせしはかくなりてはなげき

然ふうかうおすこの人へあこの人へ也
やしのたず僧おかきまさりぬ
ことあらぬよしにもそなし求に
まさまさる程遠ひいそ此寺にさなたわ
じゝ小ゝ僧共よし申しけれは
道ひへ参所なみえまいらばば又種を
本誠しるうあらすしこ我僧を

あしくなるぞそは女ハ山伏を
みちのひまし給そ逃めく渡折返
ひうり河乃水以かり増りしのハ
河の上下越かなくこ所くへ立
またまりり二さの妻他と成て
河をも渡すくせをよむこしけ
るにきたる家しこ越ありしの

ごうしゆのおりたるをあやしめ
龍頭をくはへ七まとひまとひ
ほのほをいだし尾をもつてたゝけば
鐘は即湯となつて
ついに山伏をとりをはんぬ
なんぼうおそろしき物語にて候
ワキツレ 承り言語道断の事

おそろしき物語こそ承れ
其時の女の執心のこつてまた
此鐘に障碍をなすと存じ候
人の行力もうやう法にてゆく
ちからをあはせて此鐘を
二度鐘楼へあげんとおもふは
ワキツレ 尤しかるべう候 ワキ上 かのん流て

ひとり河原懐ずゝこの事ん免
法くなともりきの法力深く
へきうと 皆一円小諍をあん
東方ハ 降三世明王 南方に
軍荼利夜叉明王 西方ハ大威
徳明王 北方ハ金剛夜叉明王
中央に大日大聖不動うこなり

為りぬ のさ法なる然 最後三界作
阿日羅南蜆多摩訶嚕遮那娑婆
多耶佉阿羅呪干結 が我説者
以大智恵ぞれ為力是及力成佛と
どの勉力を以のあふんハば乃
明ミりきの乃 候ようのさう
以きくうこなる祈念はべく

びんやうせ家に手科な羅ん
ずゐ画板の偶はまの火焔の
恵りふわ我立てう以のわ尋ね
いのまい乃らま使のとは篠
しとむいそびうま悦このかま
をともあうしく一がと闇く
篠糸りひ夷あんたわあまみよ

蛇絲はあうし拝たわ　篠箒系
方まる說清篠篠請西方白拝白說
篠請中央黄拝黄說一大三寸火
子世界の恒河乃說王薬懸納字
あひみせ自篠のらんむまなき尽
いゑく小大蛇乃あ波へ夷えと
新里新し拝の清なと書ろかり

またおほあり侍るまゝに

ごのぼりむの侍る侍くはきは

絶次些なほそれ方を唇く

びらの鉢河なみ深淵ゐ花ぞろう

いやうりくはのうへんたゆぬと

隠老ゝちきやり本坊より縄里

れはく